



がモーニングを兼ねてカフェに通っていたり、館内に並ばパンやお惣菜をお弁当を求めてお昼時には地元の人やお子さん連れのママたちなどたくさんの人で賑わう憩いの場になっています。

そんな穏やかなカフェの向こう側にある福祉事業所というと子どもたち、お年寄り、障がいのある人地域の人すべての人が交じり合い、同じ空間で生活を送っています。

管理者の田中さんは、多くの業務をこなす中でも、子どものケアに関して、職員とも話し合い、「まず職員の研修しよう」と障がいのある

子どもたちを受け持っている事業所の担当者はもちろん、高齢者福祉の担当職員も全員、研修を受け、勉強を重ねていったといいます。

職員はパートさんを入れて現在28名、「強い女の人はつかりです。強い女性たちが愛情をもって、新人も厳しく育てています」と、その逞しさとアットホームな雰囲気を感じ、「ここで働きたい」と利用者からスタッフになる人も多いといいます。

「ここに行ったら助けてくれる」「子どもたちの安全地帯を確保するために」

何があったときに「ここに行ったら助けてくれる」と子どもたちに知ってもらうためにも、「継続すること、継続できれば何もできない」と話す田中さん。学校や学童保育園、「コミュニティセンター」、児童館、民生委員や児童委員など、施設開設時から連携をとって、イベントのチラシを掲示してもらったりなどの交流を続け、心配な家庭の保護者とも自然と会って話をし、保護者同士でも話ができる機会を設けているといいます。

「つだまちキッチン」の開設と共に始めた子育て支援イベントや地域交流イベントは外部講師も招いて行

い、様々な人が関わりあうことで、孤立を防ぎ、互いに助けあうネットワークの構築に役立っています。

当初、イベントとなる特別な日という感じで、認知症の高齢者や障がいのある子どもたち、一般参加の赤ちゃんやママたちと同じ空間で過ごせるか、不安に思い、心配して、気を通うこともあったそうですが、高齢者が、うるさくしている子をしつける姿を見て、それが自然だと感じ、参加している人もそういう状況を受け入れるようになったそう。

今、「コロナ禍でイベントも子ども食堂もお休みしているそうですが、子どもたちの居場所となるためにも「気を遣わず、飾らず入っている、参加できる、受け止めてくれる人がいる」といった安心していられる場所を作りたいという田中さん。

特別なこともなく、飾ることもなく、誰もが自然体で過ごせることが「当たり前」の日常を築くことが、田中さんが目標とする「誰も孤立することのない地域社会の実現」のための第一歩といえます。その輪が「つだまちキッチン」であり、そこでの日々が多くなる人にとって笑顔に溢れる時間になるよう願います。



Tsuda Machi Kitchen (つだまちキッチン)

場所 徳島市津田本町2丁目3-57
電話 088-635-1295
URL <http://tsuda-machi-kitchen.asagao-fukushikal.jp/>

※利用料金など詳しい情報はホームページをご覧ください。

【つだまちキッチン(通所サービス)】
要支援、要介護認定者対象。料理を通じた機能訓練やアロマオイルエステも体験できます。

【つだまちキッズ(放課後等サービス)】
適所受給証のある小学生～中学生対象。学習と運動を中心とした教育が特徴。

【ユニバーサルカフェ(地域公益事業)】
日替わりランチ(11:00～13:00)は1日限定20食。コーヒーやパン、お惣菜などの販売も他、定期的に子育て支援や地域交流イベントも行っています。



Tsuda Machi Kitchen つだまちキッチン

すべての人が交ざり合い、同じ空間にすることで生まれる素晴らしい化学反応



ユニバーサルカフェという魅力的な空間

木造のオシャレな外観が印象的な「つだまちキッチン」。ここでは要支援、要介護の65歳～100歳を対象とした高齢者デイサービス、小学生～中学生を対象とした放課後等デイサービスを行っています。隣接し

た場所には児童発達支援事業所、隣には成人女性向けの共同生活援助、60歳以上の一人暮らしで傷病等の理由で食事の準備の困難な方を対象にした配食サービス、誰でも利用できるユニバーサルカフェといった事業を行っています。

このような外観デザインにしたのは、いかにも「福祉施設」と思われるような場所にならなかったという保岡統括施設長の思いがあります。

「外観も「スターバックス」みたいにしてお願ひして、あえてデイサービスの看板も付けませんでした。その方が気軽に入りやすいです



「つだまちキッチン」のある徳島市津田地区には、もともとデイサービスや障がい者施設はありませんでした。開設にあたって町内会長さんや民生委員さんのお宅へ何度も足を運んで話を聞いたり、一軒一軒挨拶に回ったりして、徐々に信頼関係を築いていったといいます。

「初めはなかなか受け入れてくれなかった地域の方も、事業所として地域のお祭りに出店したり、敬老会での介助や一人暮らしの高齢者の食事会への送迎、自主防災のお手伝いなどをしたりしているうちにだんだん距離が近くなり、受け入れてもらえることができました。

一度受け入れてもらって、すごく温かく接して思えば、繋がり強い、良い町だとも思っています。」

今では「幼馴染なんじゃ、ワンちゃん」と8歳を過ぎたおじいさんたち

よね。ユニバーサルカフェはどんな方にも利用していただきたいので、近所のお年寄りやお子さんたちが来て、気軽に声をかけあえるような、オープンな雰囲気を作るためにも見た目にはこだわっています。

カフェスペースの隣には交流スペースがあり、その向こうに介護サービスや児童発達支援を行う福祉ゾーンがあるのですが、扉を隔ててガラス越しにテイルームの様子が伺えます。壁を設けて完全に分断してしまわずにはなく、互いに気配を感じられるような、穏やかに繋がるほどよい距離感は心地よく、それぞれ

が安心して過ごせるよう工夫されています。

地域に必要とされ、愛される施設に



なかもとこ
●管理者 田中 智子さん

約15年勤めたアパレル業界から福祉へ転身したのは、「社会福祉法人あさがお福祉会」福祉の統括施設長の保岡伸哉さんから声をかけられたのがきっかけ。保岡さんは高校の先輩で、田中さんのサービス業での勤務経験を活かし、「サービス業としての福祉」という視点で福祉に携わって欲しいと依頼。「介護のことも全然何も知らなかったんですが、逆に加わってたらできなかった」と当時を振り返ります。